

# 第15回

## 秀麗富嶽十二景写真コンテスト

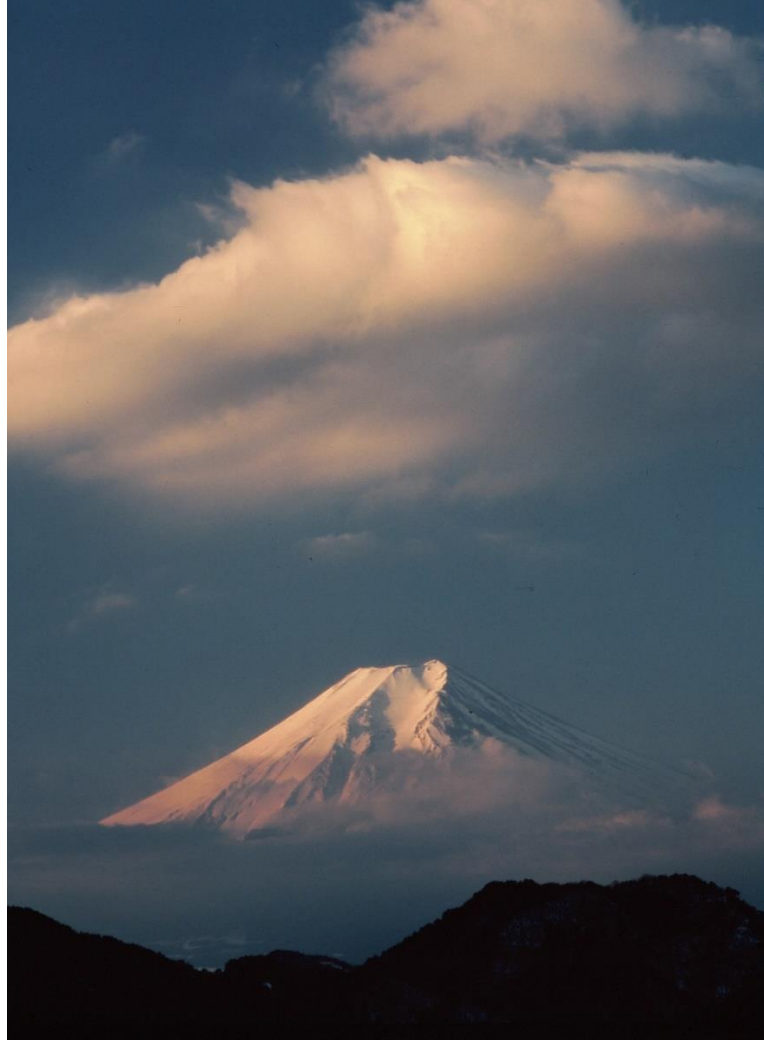
### 入選作品

最優秀賞

中天の彩り

大内 京子（千葉県我孫子市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

本年、この十五回から初めて加わった撮影地・お伊勢山からの朝富士である。まだ光当らず黒々と沈んだ前山の上、朝雲に山裾を覆われて中天に浮かぶ富士山の美しさ。そこには凄さも強烈な個性もない。だが、これこそ富士山！と誰しものが思う美しさと端麗なたたずまいがある。いまだに色づきの残る朝雲が上空にあって、富士山とみごとな調和をなしている。柔かく、しかし明確さを失わず、その中に無限の調子を含んで富士は立つ。

絶好の条件に恵まれたともいえるが、その条件を生かし切るのは至難の業である。何のてらいもなく真つすぐに富士を見据えたところに、最優秀賞につづく道があったといえる。

推薦

朝焼け

天野 昭吾（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

いつも思うことだが、氏のこのコンテストに賭ける情熱には及ぶ人はいない。常に十二山のほとんどを登り、そこから撮影した富士山を出品する。そして、そのどれもが一級品といえる作品なのである。十三回は最優秀賞を手中にし、本年もまた推薦をものした。地元とはいえ、その行動力には脱帽する。

今回の推薦作品は雁ヶ腹摺山からの朝富士である。何ととっても他にぬきん出た人気の山であり、この山から撮影され、出品される作品数はつねにダントツである。今回も37点の多きをかぞえたが、あまたの作品を退けて天野氏が唯一点の出品で推薦を獲得した。まさに狙いすました一作であり、氏の情熱が結晶した快心の作であった。

推薦

新緑

夏目 政俊 (愛知県豊橋市)

ハマイバ



白簾史朗氏講評

作者は昨十四回コンテストに初めて応募され、入選を果たされたが、今年是他を一気にゴボウ抜きして推薦に駆け上がった。作品もまた、それにふさわしく、まさに燃えるが如き新緑の葉むらのかなたにまた雲深い富士山の構図は、季節にふさわしく明るさとみずみずしさに満ちている。近来あまり見られなかったさわやかな作品である。実をいうとこの撮影場所はハマイバと記してあるが、実際にはハマイバでなく、大分手前からであり、そここのところは今後注意すべき点である。構図的に見ると、中間部の翳りが少々気になるが、まず秀作であるのに間違いない。

特選

霧に明ける 長谷川 政雄（山梨県大月市） 清八山



白簾史朗氏講評

うっすらともやのかかった富士山の夜明けは夢のようにはかなく美しい。富士の右上方に残月が懸かって、一層その感を深めているが、何となく納得できないものを感じたが、果たして多重露光によるものであったのは残念であった。納得できなかったのは月齢はともかく、残月の色が朝やけ時にそぐわなかったことであるが、本来ならば落選である。ただ、そのことは不文律として断わってなかったのはこちらの落ち度であったため、高位の入選となった。だが、以後はこのような手法は許されないことを、よく心してほしい。ネイチャフォトとは飽くまで自然のものを自然に、表現するものであることを知るべきである。

特選

朝日をあびて輝く紅葉

村上 敏幸（山梨県大月市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

題名が少し長く、冗長に感じられる。それに紅葉というほどの色づきがないのも残念。しかし、さわやかな秋の気配が感じられる冷たさが画面に満ちている。推薦の理由はそれらのところにあった。手前右方の2本の木、左方の富士山、この並べ方は中々堂に入ったものであるが、富士山の真中に一本の樹木のあるのはいただけない。折角の秋の気配がこの小さな木で大分損なわれてしまった。作者は第十二回から応募、初の入賞、それも特選である。4回目にして、というが、その間の口惜しさと、その積み重ねがここで結実したわけで、何とも目出度い。今後またゆむことなく精進して、最高位を狙ってほしい。

特選

薄紅の彩り 池田 浩樹（山梨県大月市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

第十一回からの応募、5回目にして入選、しかも特選である。寒い思いをして本社ヶ丸まで登り、我慢した甲斐があったといえるだろう。特選にふさわしい朝陽に染まる霧氷が遠くの富士に対して実によく調和している。富士山の色づきがいまひとつであるのが惜しいが、そのときどきの条件でこれは致し方ないことである。清八山と異なって左からの尾根が若干下方に移るのでより霧氷がきわ立ったといえる。こうしてたゆまずに一步一步山と写真の道を登るところに進歩も名誉がともなってくる。それにいままでの本社ヶ丸の富士山と一味ちがった表現であるのも喜ばしい。ぜひ次回も期待する。

入賞

雲海に明ける 帯金 晃（静岡県沼津市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

5番山頂の奈良倉山は、2番山頂の小金沢山と並んで、もっとも富士山に遠いため、撮影には不利で、仲に好作品が出ない。だが、ここで初めて素晴らしい作品が応募された。

帯金氏も第十一回からの出品で、全体としては遅い方に入るが、十二回から三期連続して入選、今回で4回目である。今回まことに惜しかったのは、この奈良倉山の作品は優に特選以上、ときとして最優秀にも位置するほどの好作であった。が、運というものはどうしようもない。今回は特別に好作品が大挙して応募があり、涙を吞まざるを得なかった。手前の雲海、中景の明け初めし山肌の彼方に富士が浮かぶ。本当に惜しかったといえる



入賞

秋の夕暮れ 宮地 広之（東京都世田谷区） 高畑山



白簾史朗氏講評

高畑山からの夕暮れ富士であるが、全体の構図は、百蔵山からの瀨瀨麻實氏の「残照の富士」によく似ている。だが、黒雲は上空に少しだけあり、あとは少し色づいた全天にひろがる雲で色あいも異なる。これはやはり3月と9月のちがいもあり、そのときどきの条件に左右させられるので致し方ない。しかし、高畑山は滝子山、笹子雁ヶ腹摺山、牛奥ノ雁ヶ腹摺山とならんで撮影しにくい山として有名である。それをうっすらとした黄金色にほぼ統一した技法は買うべきものがある。でき得ればもう少し周囲を入れこんで、空部の黒雲をもっと入れた方がよかったろう。第11回から連続5回入選のベテランに期待する。

入賞

晩秋の朝に 谷口 一只 (埼玉県加須市) 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

小金沢同様、牛奥ノ雁ヶ腹摺山はアプローチが他の山々にくらべて、比較にならぬほど長く辛い。そこへ日の出に間に合うように登るには並たいていの苦勞ではない。だが、それを克服して、初めて栄冠を手中にできるわけで、そのよるこびはより大きいと思う。

右手前に3本の立ち木を置き、左奥に富士山を配した構図は類型的ではありながら、しっかりと要所が決まっていて安定感がある。難をいえば中間部がうるさいが、これは影地の土地的特徴によるので致し方ない。ただ、左手下にスキの穂のボケがあるのは今後注意すべき点である。全体のコントラストによって、秋富士のすがすがしさが生きている。

入賞

烈風に焼ける 谷口 一只 (埼玉県加須市) 高川山

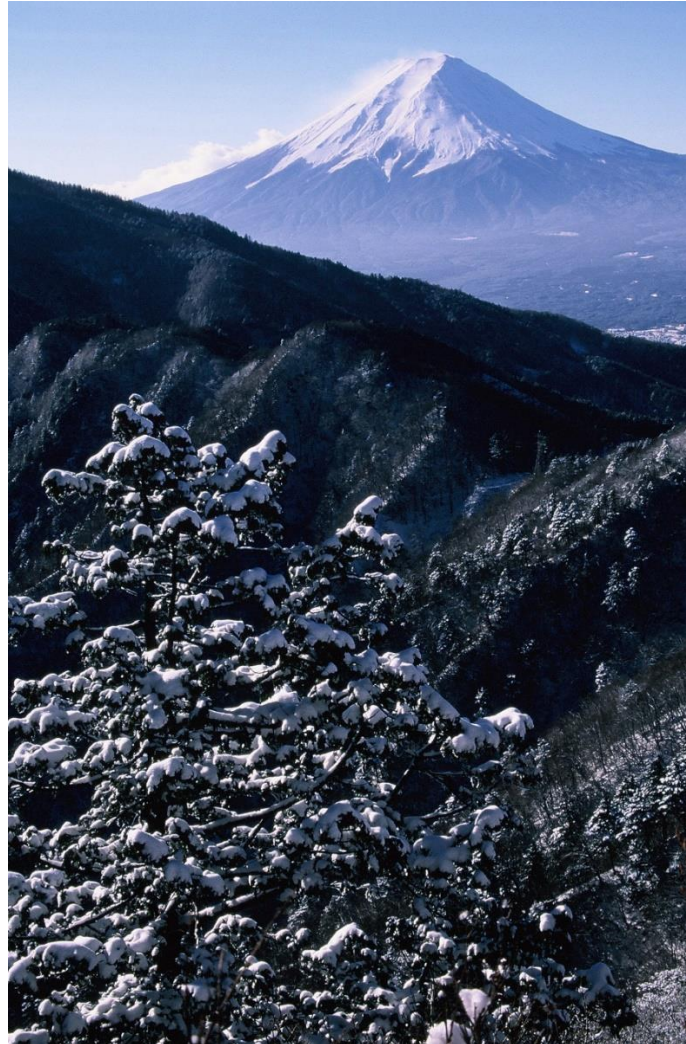


白簾史朗氏講評

どうも似ている富士と思ったおり、今回の佐藤知津夫氏の作品「荒れる富士」と場所こそ違え、同年同月同日の撮影であった。佐藤氏は大蔵高丸、こちらは高川山である。まず題名であるが、佐藤氏のところでも書いた通り、烈風は山頂付近だけで、それに焼けていない。八合目より下は荒れていない画面中の大部分が静穏の感じであるためそぐわない。それにアップでなく、ロング描写であるため、よりその感が強い。下部の雲のあたりから切りとったくらいのアップで欲しかった。そうすれば題名どおりとなる。条件をよく捉えているが全体として見て富士山が少なく、余分な暗部が多いため損をしている。それに山頂右下がりとなっている。

入賞

厳冬の華 高橋 英子（東京都大田区） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

雪のある期、本社ヶ丸に登るのは、さぞ大変だったろうと思う。ことにそれが女性であってみれば、その苦労は倍加する。だが、高い場所に登ることによっての心の浄化はしばしば好作を呼ぶ。それはこの作品に如実に表われている。さらに横位置でなく、縦位置としたところに作者の工夫が見てとれる。というのは、横位置であれば中景の黒い樹林の尾根がさらに横にのびて大きくなり、逆に雪の付いた樹林の部分が少なくなって、中景がグンと重くなってしまふ。それがこの作品のように縦位置になると、中景が少なく、手前が多くなり、全体のバランスがとれる。それともうひとつ、題名の工夫もみられ「・・・の華」とあるところもよかった。

入賞

雪煙光る 高津 秀俊（山梨県大月市） 笹子雁ヶ腹摺山



白簷史朗氏講評

これまた題名がなっていない。「・・・光る」というのはこうした状態ではいれない。たとえば逆光だったとすると雪煙をとおした光で光った状態となるが、横光線では現に光っていない。題名というものは写っている現象を的確に表現するもので、自分勝手な印象でことばに当てはめるものではない。そのため、事実と異なるものとなって、作品を一語で説明できなくなってしまう。

この作品もまた、画面中心線近くに山頂が置かれていて、動き、方向感といったものが見られない。また山体の大きさと画面比率、空部の空きも不適切である。もっと山体を大きく、したがって雪煙も大きくして作画を考える必要がある。

入賞

秋色

高津 秀俊（山梨県大月市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

まことに色あざやかなカエデの紅葉、それで画面の大部を囲み、右下隅に富士を配した手慣れた構図であるが、秋の感じを的確に表現している。紅葉の発色、上空にひろがる雲の状態も秋という季節を強調する手助けをしている。しかし、ちょっと問題になるのは、富士山の置かれた位置である。紅葉の枝のひろがり状態、スタンスの状況で思うようにいかないこともあるだろうが、ここはもう少し富士山を左方に置くべきであった。ほんの少しだけと思える左下の空が今作の引きしまった感じと不調和に力を逃してしまっている。富士山上部の枝の差し変し中心に富士山を入れこむことに苦心したためと思われるが、もうひと工夫あるべきだった。

入賞

川霧流れる 高津 秀俊（山梨県大月市） 岩殿山



白簀史朗氏講評

題名が実際にそぐわないことが、まず第一に感じられる。「川霧」という形容は通常、川面に湧き、漂い流れるものをいう。この作者の霧はすでに上空に昇って雲となって山間を漂よっている。したがってこの場合の題名は「山間に雲湧く上に」というようなもので欲しかった。それとは別に、作者の調子は美しく、朝の情景をみごとに再現している。たかだか634メートルの岩殿山から撮影したとは到底考えられない高度感を表わしていて、その技術の高さをもの語っている。ただ、この作者も構図的に左重りであって右方が軽いのは、富士山を中心線に寄せすぎたため、ここはもっと左方を入れこみ、右方を切るべきであった。

入賞

秋景 高橋 利延（神奈川県相模原市） 姥子山



白簾史朗氏講評

ややシーズンには遅かったが、作品はまさしく秋景である。紅葉の色はやや悪いが、その悪い分を新雪が埋め、全体としてさわやかな感じを演出している。雁ヶ腹摺山までは登っても、姥子山まで足をのばす人はあまりいない。そうした点でも熱心さがうかがえるのもベテランゆえであろうか。構図的は一応整ってはいるが、惜しむなくはちょっと中心部に主題がかたまりすぎた。右下と左方および左下の部分がボケと空間とで緊迫した感じが損なわれている。左方の空きはカメラポジションを右に移せばよいが、さてそのあとの右方と右下が空く、そこにもうひと工夫必要となる。だが、このことを生かして、次回はさらなる進歩をした作品を見せてくれると思う。



入賞

五月の富士 山下 政明（神奈川県秦野市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

5月の富士山としては画面上での説明がない。5月といえば新緑と花にであり、空はさわやかに晴れ上がって、雲は輪画がハッキリしたものが欲しい。この作品から見ると、下方は黒木の森で、中景の山にも緑がない。富士山には辛うじて春の新雪があるが、上空は巻積雲であり、通常この雲は秋の雲である。たとえ実際にはまぎれもない春5月であっても、この場合は「秋空高し」といった方が作品からみてふさわしい。まあ、春であるから「秋空・・・」とは付けられないが、「富士山上蒼空高し」なら画面にふさわしい。その場合でも、もう少し下部の黒を切って、その分上部にのぼすことが必要となる。

入賞

靄の中の一瞬 大戸 康世（山梨県大月市） 清八山



白簾史朗氏講評

すでに大ベテランといってよい作者である。応募は第一回からで、通算11回、推薦・特選各1回、入選3回をかぞえる。今回は一挙2点の入賞である。作品はカッチリとまとめ上げてあり、色彩再現、情景描写も的確であるが、残念なことに富士山頂が画面中心部に置かれてしまったがために、安定感はあるが方向感と動きが失なわれてしまった。条件としては最高といえ、まことに惜しいと思う。一般的にはどうしても富士山頂や山の頂上を二分した画面中央部に置くことが良いと信じられているが、自然は生きているのであり、刻々と表情も移り変わる。安定だけで中心部に位置させるのは構図ではもっとも悪い作画法と考えたい。

入賞

お伊勢山の春

大戸 康世（山梨県大月市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

上方4分の3の面積にサクラを入れこみ、下方中心に富士山を配する典型的な日本的風景を形成した。サクラの花むら中心部の色がちょっと薄くヌケている感があるのと、サクラ全体がアウトフォーカスであることが指摘されるが、これは富士山へのピントにあまりに執着したためであろう。したがってアトピンといわれる後方焦点になってしまった。こうした場合、もう少し前方にピント合わせをし、絞りこむことで全体に合わせることができる。それと苦言をひとつ、作品を台紙に貼って出品するのは規則に反し、本来ならば入選取り消しである。さらに応募票を縦位置写真に横に貼ってある。こうした不注意は今回だけをお願いしたい。

入賞

残照の富士 瀬瀬 麻實 (岐阜県多治見市) 百蔵山



白簾史朗氏講評

これまた題名に難がある。富士山を撮っているのだから、富士山が画面中にあり、誰が見ても意図は明確である。よほどのことがない場合、「富士・・・」とか「・・・富士」のような題名を付けない方が有利である。この場合も「昏い残照」といったような、若干心理的なものの方が印象が強い。作品的には実に力強く、女性ながら表現力はひと一倍すぐれていることが感じられる。ただ単に美しく撮るだけが写真ではなく、また作品的にすぐれているともいえない。その点、この作品は上部への雲の入れ方、下部の影との配分はみごとで富士山そのものの位置も申し分ない。ただ、右方の雲の赤らみがちょっと弱かった。ここに黒い乱れ雲でもあったら、と惜しまれる。

入賞

荒れる富士 佐藤 知津夫（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

常には優美で端麗な表現が多い大蔵高丸からの富士山。ところがここに表わされた富士山はつねに私たちが見、考える大蔵高丸からの富士山の印象をみごとにくつがえしての豪快な表現である。これは6×6判に250ミリという長焦点レンズによる拡大化をさらに引き伸しの際にプラしたと思われるが、作者の意図はそれをみごとにクリアーし、自己の考える富士の再現とした。通常、この程度の地吹雪は富士山ではいたってふつうのことであってさほどには思えないが、手前の三ツ峠山が雲一片なく静もっていることによって荒れの状態がよりきわ立ったという効果もある。構図的にも単純化され、少に調子、色調の地味なことも効果を助けている。

入賞

ちぎれ雲流れる初冬の富士 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

この場合、主題は雲であり、副題として富士山がある。したがって題名は間違いとまでいえないが冗長でありすぎ、リズムに欠ける。千切れ雲も、初冬の富士も写真でわかるので、こうした場合、細かな説明ははぶいて、「富士山上、雲流る」だけの方が簡潔となる。さらに雲が主題であるから、もっと空部を大きくとって富士山の下部を切ることが必要となる。富士山は五合目位から切ってその分、空を大きくのばす。これで上部のかくれている大きな雲と富士山との間を千切れ雲が流れるという設定ができ上がる。現象をどう受け止めて、自分が表現しようと考えたことに最適な切り取り方をすべきである。また、富士山をもっと小さく写してもいいだろう。

入賞

白雪光る 高宮 徹（東京都港区）



白簾史朗氏講評

登りやすい山は十二景中にも数あるが、扇山もそのひとつである。しかし、この山からの好作品は仲に出ないところを見ると、案外登りにくく、撮りにくいのかも知れない。作者はこのコンテストに今回初めて応募されたのだと思うが、そうしたジンクスをはねのけて、こうしたすばらしい作品をものされた。とすると、いままでの作者は少し怠けていたのではないかと感ぐりたくもなる。山頂直下にあるカラマツの梢二本を前景に薄もやに煙る下景からぬきん出た富士の崇高さは例えようもなく美しい。梢をあえて小さく入れたことで中間部が広くなり、富士山の高さが増した。心にくい表現である。

入賞

紅化粧 坂本 恒義（神奈川県相模原市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

作者は第14回に初応募し、今回2枚目の応募で初入選された。作風は真正面からのケレン味のないもので好感が持てる。九鬼山といえば最近、山頂付近の植林の丈がのび、非常に撮りにくくなっているのが苦労されたことと思うが、富士山を大きく入れこみ、下部を省略してまとめたところがよい。ただ残念なのは、富士山がどまん中に位置してしまったことで、こうした構図は慣れないと、つい陥りやすい弊害で、ベテラン中でもしばしば見られることがある。左右の山や事物を利用して、富士山を若干中心から離れた位置に移す構図を今後は心がけられたい。「紅富士」ではなく、「紅化粧」としたところはよい。また発色も題名に似合っている。



入賞

黎明 伊藤 恵子（東京都大田区） 滝子山



白簾史朗氏講評

うっすらとベールをかけたように朝もやが富士を覆っている。そのため厳寒の冷たいかがやきが柔らげられて、何となく暖かい感じのする朝富士となった。滝子山というとはある意味では小金沢山や牛奥ノ雁ヶ腹摺山よりも辛い道中を強いられる山として有名であるが、この端正で格調高い富士山に恵まれれば、それまでの苦労はすべて報いられたような気になるだろう。たっぷりと雪もつき、風もなくおだやかな冬の朝にシャッターを切る幸せを噛みしめるときだ。そういえば今回、21人の入賞者中、5人の女性がいますが、もっともっと増えてほしい。女性でしか撮れないデリカシーあふれる作品で、この12景をもっともっと有名にして欲しい。そう考えるのだ。

入賞

霧氷の朝 八巻 長子（山梨県中央市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

これまた珍しい作品である。あの長い林道をえんえんと歩くのは、いかに大変かは万人承知な位である。しかも雪道をたどり、雁ヶ腹摺山山頂となると気が遠くなる。そのため、この山からの冬の展望がいままで無かったのかといえる。作者は敢えてそれに挑んで成功した。いや、作者としては入選では不足であろう。撮るからには最優秀賞を、と考えるからである。折角の作品は難をつけるつもりはないが、もうちょっと早い時間帯にシャッターを切って欲しかった。手前の雪面に光が届かぬうちに。そうすれば樹木の梢の方のみの光がそれが浮き出しとなり、富士山もきわ立つ。折角の PL は利いていないか、露光オーバーである。

## 総評

審査員長 白籬史朗

早いものでこの十二景コンテストも第15回を数えるに至った。今回は秋のうちから例外的に雪が降り、それからも折りにふれての降雪が富士山を飾って、撮影には好適な富士山を応募者の皆さんに提供してくれ、ある意味ではいつもより恵まれた年であったといえる。そうした好運もあってか、不景気風の吹き荒れる世相にも拘わらず、コンテストの出足は好調で、総応募数287点、応募者数48名をかぞえた。

これは昨年に比較すると応募者数では6名の減であるが、作品数では逆に17点の増加をみた。内訳は市内11名で75点、山梨県内で6名の49点、県外では31名で163点であった。

山頂別に記すと一番山頂の雁ヶ腹摺山は応募23名と作品数37点でダントツ、姥子山は7名に10点であった。二番山頂牛奥ノ雁ヶ腹摺山は12名と17点、近年にない成績であったが、小金沢山は3名の5点と相変わらず振るわなかった。3番山頂大蔵高丸は少し減って14名の24点、ハマイバ6名の23点と快調。4番山頂滝子山は4名で4点、笹子雁ヶ腹摺山は同じく4名で4点と相変わらず低調であった。5番山頂奈良倉山は20名で32点、これまた意外な数字であった。6番山頂扇山11名の13点、7番山頂百蔵山は14名と21点、8番山頂岩殿山は13名の22点とまあまあで、お伊勢山は9名で15点と初めての撮影ポイントでありながらもまずまずの数。9番山頂高畑山は5名と5点、倉岳山は4名に6点、10番山頂九鬼山も5名5点、低い山頂でありながら、どうしたわけか低調である。11番山頂高川山は13名に13点、12番山頂本社ヶ丸は8名に8点、清八山は13名の20点と快調であった。

前回からは、大蔵高丸、ハマイバとあまりに近くあるため、白谷ノ丸を除外したが、なるべく異なる視点を増やすため、新たな山頂を検討中でもある。

今回応募の作家の皆さんは、第1回からと切れず応募の方が2名、2・3・6・8・を休んだ方が1名、4回から通じての方が2名、5回からが1名、6回からが2名、7回からが4名、その他9回からが2名、10回からが1名というが、その中で今回落選したのはただの3名のみで、他の方はすべて入選した。これを見ても、いかに継続することが大変であると同時に、入選率が大幅に増加することがわかる。ちなみに今回最優秀賞の大内京子氏は第1回と、あと12回から連続の応募であった。また、初回からの応募者中で入選入賞は16回を数える天野昭吾氏が最高で、次いで4回からの高津秀俊氏が12回、同じく5回目からの八巻長子氏が12回と次いでいる。さらに4回からの瀨瀬浩恭氏は今回惜しくも

落選したが、通算8回の入選、同6回からの小谷哲朗氏は今回で7回、初回からのひとり加藤泰郎氏も今回落選だったが通算7回、初回から4回休んだ大戸康世氏も5回がかぞえられる。今回惜しくも入選しなかった内藤元次氏も過去6回の入選がある。

ここで特筆すべきは、過去4・6・8・9・10回に最優秀賞、5回に推薦、7回・8回に各特選、4・6・9回に入選、5回に入選2を獲得した奈木正次氏のことであるが、当時はあまりにダントツであったがため、当分休応募扱いとなっていたが、他の応募者のレベルが大きく上昇したため、来期からの応募を再開させることに、審査会の意向が決定した。

また、今回はレンズ名・F値・焦点距離の不記載が多くすべての点でデータとしてなっていない。次回からはこれをもっと厳重に審査対象としたい。また、いままでと異なり同一山頂からの富士山、さらに同一作者の複数入選が多くなったが、これは、あまり山頂を作者に固執するとコンテストの質が低下する恐れが出てきたので第15回を機に改正することにした。

今回、最優秀賞を射止めたのは、お伊勢山の大内京子氏、推薦は一昨年最優秀賞の天野昭吾氏と夏目政俊氏、特選は長谷川政雄氏、村上敏幸氏、池田浩樹氏の3人である。天野氏は初回から一度も休まずの応募、夏目氏は14・15回と2度の応募、2度の栄冠であり、長谷川氏と村上氏は12回からの連続応募、池田氏は11回からの応募であった。過去の応募はともかく今回は初入選だったのは推薦の夏目氏、特選の長谷川氏と村上氏。入選の愛澤氏と上位の方が多かった。

今年も昨年秋にまして降雪が多く、これから好条件になることが期待される。奥地はともかく、周辺の低山での撮影にはチャンスといえる。大いに張り切って撮影、応募を期待している。ただ、気を付けていただきたいことは、露光値のことで、決してオーバーやアンダーにせず、また印画引き伸ばしの際、他の個所はともかく、富士山の白雪が質感(マチエル)が飛んでしまわないよう、ラボに厳重に注意してくれるよう依頼する必要がある。調子・色調・構図の悪い作品、強コントラストの作品は一発で落選する。そのことを強く意識してほしい。